

書 評

佐藤繭香著

『イギリス女性参政権運動とプロパガンダ
——エドワード朝の視覚的表象と女性像』
(彩流社、2017)



中村久司著

『サフラジェット —— 英国女性参政権運動の
肖像とシルビア・パンクハースト』
(大月書店、2017)



竹内 敬子

2018年は、イギリスの女性が、制限つきながらも参政権を獲得して100周年にあたる。イギリスではこれを記念し、女性参政権運動に献身したミリセント・フォーセットの像が国会議事堂前広場に建てられた。メイ首相は、さる4月24日に行われたこの像の除幕式で「もし、フォーセットがいなかったら、私はここに首相として立っていなかったでしょう」とコメントした。¹ 2018年8月現在、イギリス各地では、女性参政権運動の「記憶」の「確認」がされているようで、先日、私がマンチェスター中央図書館を訪ねた折りには、売店で、1908年秋の行進と集会に向けたポスターのデザインを利用したさまざまなグッズが売られていた。

日本では、昨年、イギリスの女性参政権運動に関する注目すべき著作が相次いで2冊出版された。1冊目は佐藤繭香『イギリス女性参政権運動とプロパガンダ——エドワード朝の視覚的表象と女性像』（彩流社）で、これはイギリスで女性参政権を求めて果敢に闘った女性たちを描いた映画『未来を花束にして』（原題：Suffragettes）の日本公開と時期を同じくした出版とな

り、各映画館では、同書が販売された。映画では、「投石」など、女性社会政治同盟 (Women's Social and Political Union, 以下 WSPU) の活動家たちのミリタンシー (戦闘的行為) を強調する場面が散見されたが、佐藤氏の著作は、WSPU を含む諸女性参政権組織が20世紀初頭に行った、行進、バザー、演劇など、多彩な視覚的メディアを利用した大衆向けのプロパガンダに焦点をあて、これまで知られることの少なかった「ミリタンシーの影にかくれていた部分」を明らかにすることを課題としている。なお、映画の原題でもある「サフラジェット」とは、穏健派の「サフラジスト」に対し、戦闘的な女性参政権活動家をさす言葉である。

もう1冊は中村久司『サフラジェット——英国女性参政権運動の肖像とシルビア・パンクハースト』(大月書店)である。同書は、日本ではこれまで断片的にしか描かれてこなかったWSPUの歴史の「全体像」を、最近公開されたばかりの情報も駆使しながら描くことを試みている。中村氏がWSPUに注目するのは、彼女たちが「破壊行為」を採用した、という「特異性」のためではなく、彼女たちの運動が、20世紀初頭の女性参政権運動を活性化し、参政権獲得に「大きく貢献した」と中村氏が考えるからである。そして、自身の体験も踏まえ、サフラジェットたちの不屈の闘いを知ることが、現在の日本で差別や不正と真摯に向き合おうとする人々に「精神的な支え」を与えるであろうことを中村氏が信じるからである。

以下、2冊の内容を紹介しよう。まず、佐藤氏の著作から始めたい。佐藤氏は前述のように、女性参政権諸組織の視覚的プロパガンダに焦点をあてているが、その際、従来の戦闘派(WSPU)と穏健派(女性参政権協会全国同盟 National Union of Women's Suffrage Societies、以下 NUWSS)の二項対立的な女性参政権運動理解とは異なり、この運動を幾多の組織の有機的、複合的、総合的な「ひとつの運動」としてとらえて論じている。「第一章 イギリス女性参政権運動の大衆化への試み」では、19世紀から20世紀にかけての女性参政権運動の発展の過程が手際良く概観され、20世紀の女性参政権運動が、WSPUのミリタンシー導入を契機に、「大衆の注目」を求めるものに変化したことによって運動の規模を飛躍的に拡大していった経緯が説明される。続く3つの章、「第二章 大義のための行進」「第三章 思想の商品化——バザーと博覧会の融合」「第四章 行動する女優達

——女優参政権同盟(AFL)の活動」では、「行進」「バザー」「演劇」の3つのメディアを使ったプロパガンダが、一方での伝統的女性像の利用と強化、他方での新しい女性像の提示の可能性との関連で分析される。労働運動、社会主義運動、都市空間の形成、消費文化や芸術文化の発達などの状況の中から有用な手法を巧みに取り入れ、彼女たちはこれらの媒体を使って魅力あるプロパガンダを演出した。紫、白、緑のシンボルカラーにあふれた華やかなWSPUの行進、緑、白、黄金のシンボルカラーに彩られ「博覧会」を思わせる女性自由連盟(WSPUから分裂。Women's Freedom League, 以下WFL)のバザーの会場のにぎわい、女優参政権同盟(Actresses' Franchise League、以下AFL)の美しい仮装劇など、佐藤氏の生き生きとした描写に、思わずタイムスリップしてその場に参加したい思いにかられる。同時期にイギリスに滞在してこれらのイベントを目撃した日本人の感想が効果的に紹介され、「観客としての大衆」が、女性参政権活動家のプロパガンダにどれだけ目を奪われ、心を動かされたのか、ということが臨場感をもって伝わってくる。

政治という男性の領域に足を踏み入れようとする女性参政権活動家には、すでに19世紀から、「非女性的」なイメージが付与されていた。WSPUのミリタンシーは、この女性としての「逸脱」というマイナスイメージをさらに強化したと言えよう。行進やバザーでは、「女性らしさの視覚化」によって、女性参政権活動家への反発や彼女たちの主張に耳を傾けることへの抵抗感の軽減が試みられた。AFLが、その支援を特定の組織に限定せず、要請を受ければどの女性参政権組織のイベントであっても上演をしたこと、同じ演目が異なった組織で上演されたことが、戦闘派と穏健派の運動に「視覚の一体感」を与えた、という指摘は重要だ。どのメディアにおいても芸術性の質が高かった点も特記すべきであろう。そして、それは、彼女たちの豊かな人的ネットワークに支えられていた点、女性参政権運動が孤立した運動ではなかった点も見過ごされてはならない。

「第五章 ^{ワーキング・ウイメン} 働く女性の表象」では、前の3つの章で取り上げられた視覚的プロパガンダの中で登場した「新しい女性像」としての「働く女性」に注目し、その意味を問うている。20世紀初頭の中流階級的女性向けの雇用機会の増加により、中産階級と労働者階級の女性が、「働く」という「共通

の経験」によって結びつくことが可能になった。ただし、労働者階級の女性性は、プロパガンダの中で「同情すべき」存在、女性参政権獲得により救済されるべき存在として描かれ、利用されることも多かった。しかしながら、WSPUによる女性労働者を運動に取り込む試みや、NUWSSの労働党との接近の中で、労働者階級の女性の捉え方が変化した。「おわりに」で総括されるように、佐藤氏は、女性参政権運動が、「働く女性」という階級を越えた女性の連帯の可能性を内包した女性像を提示したことが従来の「妻」「母」「それ以外の独身女性」というカテゴリーを脱構築し、このことが1918年の国民代表法で30歳以上の女性の「戸主」に加え、「戸主の妻」にも選挙権を与えることに寄与したのではないかと分析している。

次に中村氏の著作の内容を紹介したい。中村氏の著作は二部からなり、「I サフラジェット」では、1903年のWSPU設立から、イギリスの第一次世界大戦参戦に伴う1914年の活動の停止までの歴史が描かれる。続く「II 私たちのシルビア」では、WSPUの創設メンバーでありながら、闘争戦術上の意見の相違からWSPUを離れたシルビア・パンクハーストの思想と闘争が、第一次世界大戦後の活動も含めて紹介されている。

中村氏は、WSPUの運動の「特異性」が「破壊活動」にある、とされることに批判的である。WSPUは、その結成以降、1908年6月の、首相官邸への投石事件までの4年半の間は、破壊活動も暴力も行っておらず、暴力はむしろ、警察の側によるものであった、というのがその理由だ。さらに、組織的な決定に基づく破壊行為は、結成から8年を経た1911年秋に始まったものであることも考えあわせるならば、WSPUの「戦闘性」を「破壊活動」に象徴させることは誤りだ、と中村氏は指摘する。これに加え、WSPUの破壊活動を強調する多くの著作が、彼女たちがそこに至った理由に言及しないことにも中村氏は疑問を呈する。彼女たちが自らの破壊活動の「正当化」の根拠としてあげたのは、警察側の不当な暴力により負った精神的・身体的傷の痛みを男性に理解させる必要性、男性が過去の変革で証明した暴力の運動の手段としての有効性、などであった。

第I部では、政府や政治家の動きと、それと連動したWSPUの活動の変化が分かりやすく整理されていて、WSPUの通史の概観に役立つ。また、そうした闘いに果敢に挑んだ女性たちの、逮捕、裁判、獄中での不当な扱

いと、その中で彼女たちが心身に被ったダメージも詳述されていて、彼女達の闘いの厳しさが生々しく実感される。

第Ⅱ部では、日本ではこれまで詳細が紹介されてこなかったシルビアの思想や活動の全容を知ることが出来る。シルビアは母エメリン、姉クリスタベルとともにWSPUの中心的メンバーとして、広範で重要な役割を果たしていた。シルビアは活動と生活の拠点を労働者階級が多数住むイースト・エンドに置き、社会の諸問題をより広い視野でとらえていた。シルビアのこうした姿勢や関心が、次第にWSPUの方針と齟齬をきたすようになる。

シルビアはWSPUと袂を分かった後、「イースト・ロンドン・フェデレーション・オブ・ザ・サフラジェッツ」(East London Federation of the Suffragettes、以下ELFS)を設立し、イースト・エンドの労働者階級の女性たちとともに参政権運動を続ける。シルビアは何度も逮捕・投獄されたが屈することなく命がけの闘いを続け、アスキス首相と女性労働者の面談を実現させている。ELFSはWSPUや他組織とは異なり、第一次世界大戦に反対し、また、戦争中も女性参政権運動を続けた。が、彼女たちは男女両性の普通選挙権を求めていたこともあり、1916年には組織名を労働者参政権同盟(Workers' Suffrage Federation)に変え、さらに1917年のロシア革命を受けて1918年には労働者社会主義同盟(Workers' Socialist Federation)に名称を変更する。

以上の内容紹介を踏まえ、以下、何点かにわたって、両書を論評させていただきたい。まず、評価したい点について述べる。第一に、両書の歴史叙述が大変に優れている、ということである。2冊を読み終えた時、私を襲ったのは、自分が20世紀初頭の女性参政権運動の「うねり」に巻き込まれるような感覚、20世紀初頭のイギリスに自分がワープしたような感覚だった。この2冊の叙述が持つ臨場感は、2人の著者が、史料の中の当時の人々の声に注意深く耳を傾けたことの結果であろう。

第二に、この2冊を合わせ読む、ということの意義である。上記の「感覚」は、この2冊を合わせ読んだからこそ起こったことでもあったと思う。中村氏の著作で警官による暴力や獄中の取り扱いの過酷さを知った上で、佐藤氏の著作で、それらの試練を体験している同じ人々が、バザーや行進の準備に生き生きといそしむ姿を知ると、彼女たちの姿が、突然、「立体的に」

感じられる気がしたのだ。そして、その逆もまた真であり、この運動のダイナミズムが、両書を合わせ読むことで理解出来た気がした。

第三に、両書の研究史上の意義について触れたい。佐藤氏は、女性参政権運動を「表象」を手がかりに分析する、という挑戦的な研究に取り組み、「ミリタンシーの影に隠れた部分」を見事に描き出している。そして、膨大な一次資料の中から、丁寧にプロパガンダの中の女性表象を確かな手法で抽出し、それが従来のジェンダー規範を踏まえ、利用しながらも、「新しい女性像」も提示していたことを明らかにした。特にこれまで研究のなかったバザー、演劇を対象としたことは特筆に値しよう。

中村氏は、サフラジェットの歴史の全体像を、シルビアの思想と活動の全容も含めて描くことに成功している。これまで日本では類書がなく、日本のジェンダー史研究者にとって有益な著作である。また、中村氏は、サフラジェットたちに対する警察の暴力や獄中での扱いと、それがどのように彼女たちの身体や精神にダメージを与えたか、ということを詳述しているが、これもまた「ミリタンシーの影に隠れた部分」のひとつかもしれない。彼女たちが「やったこと」だけでなく、彼女たちが「されたこと」を知る事が出来た。

次に気になった点を述べたい。一つ目は中村氏の WSPU の評価をめぐるものである。近年、WSPU の第一次世界大戦直前の破壊行為の「暴力性」の問題を、テロリズムの脅威が深刻な「現在」から振り返ろうとする動きがある。² これは、中村氏とは別の観点から、WSPU の歴史から学んだことを現代に活かそうという試みと言えよう。過去の経験を現在に活かそうという意図をもつ中村氏であるからこそ、こういう動きとの緊張関係も視野に入れるべきではないか。

もうひとつは両書に関わるもので、WSPU が労働者階級の女性に提示した「シナリオ」についてである。WSPU は制限付きの女性参政権を求めていたにもかかわらず、少なからぬ労働者階級の女性の参加を得、彼女たちは行進などの場でその存在を公にアピールした。中村氏が示すように、逮捕・投獄された際、彼女たちが上流・中流階級の女性より、さらにいっそう過酷な扱いを受けることになるにも拘らず、ただちには自身の選挙権の獲得を掲げていない団体に、彼女たちを惹き付けたものは何だったのだろう

う。男性中心の労働運動もその多くは、男性の普通選挙権を優先課題としていて、制限付きの女性参政権を要求することは、結果として彼女たちの同胞でもある労働者階級の男性の選挙権獲得を遅らせると批難されることもあった。とはいえ、労働運動の中でも、「現行法の男性と同じ資格を持つ女性に参政権を」と訴える組合も存在した。³ 佐藤氏の重視する女性参政権をめぐる議論がなされる公共圏でさまざまな組織が女性労働者に見せた未来のヴィジョンの中で、WSPUの主張のどこの部分が女性労働者の心に響いたのだろうか。その部分は両書からもう少し知りたかったところだ。

ELFSでは男女の普通選挙権をかかげたシルビアが、WSPU時代にどんな言葉で制限付き女性参政権の重要性と、それが切り開く労働者階級の女性の未来を語ったのか、というところも中村氏の著作で触れてほしかった部分だ。私の専門との関係で言えば、佐藤氏の触れた炭坑婦の労働規制の問題は、WSPUが示したヴィジョンのひとつとも言えるのだが、制限付き参政権を獲得した女性が炭鉱婦たちに「どんな未来の労働のあり方」を語り、約束したのか、それは、佐藤氏自身も言及する保護立法に寛容な立場を取り始めた社会派フェミニストが描くヴィジョンとどう異なっていたのか、というところも、もう少し知りたかった。ただし、この最後の点は、私自身が解くべき課題を佐藤氏から提示された、と考えるべきであろう。

中村氏は、「あとがき」でWSPUの運動に献身した女性の一人ひとりに「かけがえのない人生があり、闘争への情熱と貢献があった」にもかかわらず、その大多数を割愛せざるをえなかったことに「胸が痛む」と述べている。2018年という記念の年を意識して、イギリス各地で女性参政権活動家の生涯の掘り起こしがなされている。私自身も、リーズ中央図書館のLocal HistoryのセクションでFrances Theresa Garnett⁴など、これまで知らなかったサフラジェットの名前を目にする機会があった。私は女性参政権運動を専門としている訳ではないが、こうした史料に出会った時、ほんの少しだけでも目を通すことは、中村氏がこの著作で取り上げることの出来なかった多くの勇敢な女性たちの鎮魂になるかもしれない、と思った。

佐藤氏、中村氏の著作はどちらも興味深く、読み応えがあり、前述したように合わせて読むことで、より面白さが増す。2冊を合わせて読まれることを是非、お勧めしたい。

注

- 1 <https://www.bbc.co.uk/news/uk-politics-43868925>, 2018年8月14日情報取得。
- 2 Simon Webb, *The Suffragette Bombers: Britain's Forgotten Terrorists*, Barnsley, South Yorkshire: Pen & Sword, 2014.
- 3 Joanna Bornat, "The General Union of Textile Workers", Angela V. John ed., *Unequal Opportunities: Women's Employment in England 1800-1918*, Oxford: Basil Blackwell, 1986, pp. 217-218.
- 4 Frances Theresa Garnett (1888-1966), Leeds Central Library, LQP/B/GAR
——成蹊大学教授